

## 『探究』にあらわれた道徳思想

中 泉 哲 俊

### 1

簡約して『探究』というが、正しくは『人類の発展における自然の進行についてのわが探究』（Meine Nachforschungen über den Gang der Natur in der Entwicklung des Menschengeschlechts）というのである。フィヒテ（Fichte J.G.1762～1814）の勧めによってペンをとったといわれるこの著作は、1797年ペスタロッチ（Pestalozzi J.H.1746～1827）が52歳の時に発表したものであるが、『ゲルトルートはどのようにその子を教えるか』（Wie Gertrud ihre Kinder lehrt, 1801）によれば、3か年の間信じ難いほどの骨折りをもって書かれたものであるという。

終生々人間<sup>1</sup>々を問題としたペスタロッチは、この書において人類発展の社会的文化的過程を明らかにして教育説の基礎を確立しようと試みたものであり、『隠者の夕暮』（Die Abendstunde eines Einsiedlers, 1780<sup>2</sup>）の冒頭において提出された人間の本質は何かという根本的問題に対して、道徳的および社会的政治的方面から答えようとするものであって、いわば彼の社会哲学ともみらるべきものである。人類社会の問題をすべて自己の問題として観じているペスタロッチの道徳教育論は、『隠者の夕暮』『シュタンプだより』（Pestalozzis Brief an einen Freund über seinen Aufenthalt in Stans, 1799）『リンハルトとゲルトルート』（Lienhard und Gertrud, 1781～87）『ゲルトルートはどのようにその子を教えるか』等に散見している。『探究』もまた道徳に関する彼の基本的見解を知るに重要な文献である。

本稿において私は、もっぱら『探究』構成の主要部分に焦点をあてて、そこに展開されているペスタロッチの道徳思想を考察してみたいと思う。

## 2.

まず最初に、『探究』の構成がどのようになっているかを、一瞥しておこう。

序 説 主題 われとは何か 人類とは何か

第Ⅰ部 わが探究の根柢

(1) 我欲的系列

- |        |        |        |          |        |
|--------|--------|--------|----------|--------|
| (1)知識  | (2)取得  | (3)財産  | (4)社会的状態 | (5)権力  |
| (6)名誉  | (7)屈従  | (8)支配  | (9)社会的正義 | (10)貴族 |
| (11)王権 | (12)自由 | (13)虐政 | (14)暴動   | (15)国法 |

(2) 好意的系列

- (1)好意 (2)愛 (3)宗教

(3) 余自身の眼に映ずる人間像

第Ⅱ部 この書の本質

(1) わが書の本質的なものへの移行

- (1)人間と環境  
(2)人間の過誤の内面的同一性

(2) わがもっとも本質的な観点の最初の叙述

- (1)自然的状態におけるわれとは何か  
(2)社会的状態におけるわれとは何か  
(3)道徳的状态におけるわれとは何か

(3) わが書の本質

- (1)自然の作物として  
(2)わが種族の作物として、すなわち世界の作物として  
(3)われ自身の作物として

第Ⅲ部 最初対象を注視した際に余に浮かんだ単純な観点と余のもっとも本質的な根本命題との一致

(1) 第I部の(1)に対応

- ①知識      ②取得      ③財産と有産者      ④権利      ⑤社会的状態  
⑥権力      ⑦名誉      ⑧屈従      ⑨支配      ⑩貴族  
⑪商取引      ⑫王権      ⑬法的権利      ⑭自由      ⑮暴動  
⑯暴動は決して正しいものではない      ⑰国法

(2) 第I部の(2)に対応

- ①動物的好意      ②愛      ③宗教

(3) 第III部の帰結 真理と正義

帰結 わが書の最後の帰結

ペスタロッチは、まず自家生命の中に痛切な矛盾を発見し、この矛盾を自己の根本問題として、自己とは何ぞやという疑問をもって『探究』を書きはじめている。これに続く本書の主要部分<sup>4</sup>は、大体三部から成立している。

まず第I部「わが探究の根柢」(Die Grundlage meiner Nachforschungen)において、ペスタロッチはわれわれ人間生活の現実の場所たる社会を形成する外的および内的諸契機の重要なものを取りあげ、それらの諸契機を通じて人間生活の全関連への概観を示しているが、社会生活を営むわれわれ人間自然の矛盾錯綜した姿を、あるがままに明るみに出そうとする意図が認められる。

第II部「この書の本質」(Das Wesen dieses Buchs)は、第I部でとりあげられた問題を解決するための必要条件を究明する部分として、「環境が人を作る、(Die Umstände machen den Menschen.)と同時に、人が環境を作る。

(Der Mensch macht die Umstände.)」という根本命題を含むものであって本書中もっとも重要な部分を構成しているものとみられる。第III部「最初対象を注視した際に余に浮んだ単純な観点と余のもっとも木質的な根本命題との一致」(Über Einstimmung meiner wesentlichsten Grundsätze mit den einfachen Gesichtspunkten, die mir beim ersten Ins-Auge-fassen meines Gegenstandes auffielen.)は第II部に提出された問題解決の必要条件が、はたして十分な条件であるか否かを吟味し検討することに主眼がおかれている。そして「わが書の最後の帰結」(Das endliche Resultat meines Buchs)において、根本

態にあらわれてくるのである。ここに自然状態から社会状態への移行がみられる。しかし社会状態は我欲を内容とする社会の乱れであり、すでに複雑化した状態であって、自然状態におけるような単純な享樂は、もはや社会人にはゆるされないものである。

このために、動物的自然 (tierische Natur) を離れた無理な状態において、かって自然に享受することのできたものと同一のものを享受しようとする欲望から、さまざまな技巧すなわち人為的手段 (künstliches Mittel) がおこってくる。財産・利得・職業・政府・法律等は、ことごとくそれであって、動物的自由の欠乏の中において、自己の動物的自然を満足させようとするものである。「失われた自然生活の歡喜 (Wonne) を回復しよう」とする社会状態の生活は、自然状態のそれとは全く異なり、さまざまな不愉快をともなる生活となり、社会人として生活するかぎり、人は否応なしに「社会生活の軛」 (Joch des gesellschaftlichen Ledens) に縛られなければならぬのである。ペスタロッチに従えば、かくして「社会状態はその本質上自然状態の墮落によって始まった万人の万人に対する争闘の継続であり、その闘争の形式こそ変れ、これにともなる激情は軽減されず、人間は社会生活のために偏った性格と硬化した性質とをもって、その社会的不満足のために激発されて闘争を行うのである」。それゆえペスタロッチの考える社会状態なるものは、正義が行わるべくして実際は行われず、動物の利己性が社会的経済組織のもとにおいて、跋扈跳梁する状態であって、<sup>10</sup> 暗澹たる趣を有するものである。このような無法律的な社会状態においては、<sup>11</sup> 個人的道德 (Privattugend) としての好意 (Wohllwollen) とか信頼 (Zutrauen) とかは、失われた無邪気の影法師にすぎないであろう。この乱れた社会を建てなおすために、社会的正義 (gesellschaftliches Recht) が必要となってくる。社会的正義こそ人類の向上進歩をもたらすものである。しかし無法律状態に沈みはてた人間には、道德的無感覚がともなっている。ペスタロッチによれば、「人間の動物的自然は非常に根強いものであるから、なにほど社会的正義からこのような動物的自然の要求をすて去ろうと努めても、それはけっきよくかかないことである。いな、かえって逆に動物的我欲が、いたるところ

で社会的正義を食いつくしてしまう。かくしてわれわれ人類においては、自然的自由と社会的正義とは永遠に戦っているのである」。とすれば、社会的正義の実現はきわめて困難な問題といわざるをえない。<sup>12</sup>この困難な問題を解決する道を、ペスタロッチは社会的正義と社会的秩序とをもたらすために、人間の動物的自然のもっとも内奥にある感情を変形させるような、徹底した職業陶冶(Berufsbildung)を施すことに求めた。しかし市民としての職業陶冶によって畸形化された人間が、一度自由の声をきいたが最後、はたして現状に満足するであろうか。

このように考えてくると、社会的正義も社会状態も、窮極的にはわれわれを十分満足させ、またわれわれを完成させるものとはいえないであろう。いいかえれば、単に「社会的自然」(gesellschaftliche Natur)を媒介とするだけでは、われわれの「動物的自然」(tierische Natur)はその根柢からよいものに転成させられることはありえない。人は動物人として社会状態の間に処し、全く不満をもって生活するのである。もはや社会的正義に満足することもできず、さればといって動物的自然の世界にあと戻りすることもゆるされない人間にとって、より以上の根柢もしくは立場が求められなくてはならないのは当然であろう。これに対する最後の答こそ「道徳状態」(sittlicher Zustand)であり、道徳的自然(sittliche Natur)である。道徳の世界こそ、人間性に最後の満足を与うべきところであり、最高の品位であり、自由意志の世界である。

上述のように、ペスタロッチのいう人間の社会状態なるものは、人間の利己心を社会という形式に変形させたものにすぎなかった。社会的正義なるものは全く相対的な善にすぎず、したがってまた道徳と称すべきものではなかった。このような社会状態からさらに一步を進めて、人間の真の内的的向上(innere Veredlung)をもたらすものが道徳(Sittlichkeit)でなければならない、とペスタロッチは考えたのである。

## 5

ペスタロッチは「道徳状態におけるわれとは何か」の冒頭において、

余はこの世の一切の事物を、わが動物的要求にも依存せず、また社会的関係にも依存せず、ひたすらわが内面的向上純化に寄与させようとする観点においてのみ観念し、かつこの観点においてのみ渴望し、あるいは拒否しようとする力を余自身の内面にもつ。この力はわが本性の内奥に独立しているものであって、わが本性の他の力の連続ではない。その力は余が存在するがゆえに存在し、また余はその力あるがゆえに存在するのである。それは本質的に余に内在する感情、すなわち余が余のなすべきことを余が意欲することの法則となす時に、余は余自身を完成するという感情から生ずる。

<sup>13</sup>と、最後の念願たる人間生命の内面的醇化と、さらにこれが実現の可能根拠としての人間の意志の自律に対する確信を端的に表白している。自然人や社会人は道徳を必要としない。道徳がなくても、<sup>14</sup>たがいに相侵さないで生活をしていれば差支えがないのである。道徳は全く個人的なもの (ganz individuell) であって、二人の間に成立するものではない。道徳人は自然の所産でもなく、*「自己自身の所産」* (Werk meiner selbst) である。ゆえにいかなる人間といえども、自分に代って*「われ道徳的なり」* (Ich bin sittlich.) と感ずることはできない。われわれが社会状態において生活する場合には、全くたがいの道徳を信ずることなくして生活するものであるが、われわれは、自己をより高尚なものに高めることができるという感じをもつのである。

感覚の楽しみと社会的権利と道徳との相互関係は、個人成長の三時期たる幼児期 (Kinderjahre)、青少年期 (Junglingsjahre)、壮年期 (Männeralter) の関係のようなものである。そしてベストロッチによれば、幼児期、青少年期、壮年期の三種の関係について真理であることは、われわれの動物的自然、社会的自然、道徳的自然についても真理である。それゆえ動物的自然および社会的自然に全然依存しないで感じ、考え、行うこと、<sup>15</sup>すなわち純粋に道徳的であること (*reine Sittlichkeit*) は不可能とならざるをえない。動物的自然の感覚的快楽と社会状態の桎梏とを経験して後に、はじめて道徳的完成の境地に達することができるのである。単に道徳だけを眼中におけば、人は自己の自然

性の中にある動物力および社会力をなおざりにし、一つの大切なものを無視することとなる。その大切なものとは、両者の中間に存在して根柢的地位を占めるもの、圧迫とその経験とによってのみわれわれが自己の本性を知り、自己の境遇を知り、そして完全な道徳に達することができるものである。社会状態の墮落の中においては、とうてい近づきえぬ自然の無垢な状態に近接し、復歸することが、道徳の目的とするところである。いいかえれば、あらゆる苦しみや妨げの中にあえぎながらも、人生の煩いをすべて超脱した境涯を味わうことが、道徳なのである。それゆえ「全く純粋な道徳への要請」(Anspruch an eine ganz reine Sittlichkeit)は、わが社会状態の墮落の中において近づくことのできるよりは、より一そうわが自然の失われた清浄無垢に近いもの」と、ペスタロッチに信じさせたのである。彼にあっては、道徳の全き純粋性は、必然的にその出発点すなわちなんらの災禍、罪惡、危難を知らない清浄無垢の状態に導くのである。このような動物的な清浄無垢から出発して、道徳的完成にいたるまでの中間にその清浄無垢を害う世界が横たわっている。われわれはわれわれの生活存在の両極において、動物的無垢と道徳的完成との二つの光明境を望見する。しかしわれわれの現実生活そのものは、暗黒の雲の下で罪惡の嵐に吹きまわられている。ここに人間の現実の悲しむべき姿がみられる。しかし人間は、火山の爆発の廢墟の中から自己の生活を再建するように、自己の罪惡の恐るべき結果から自己を浄化する仕事を始め、よりよい生活に向かおうとするのである。動物的衝動のすべての欺瞞から自己を解放しようとする真面目に努力する行為が、真に道徳的行為なのである。動物的衝動に対抗して自己を醇化しようとする純粋な意志の努力によって、はじめて道徳が成立するのである。われわれが一切の相手の人々に対して、配慮・養育・保護・正義・権利を行う責任をもつとともに、従順・感謝・忠誠をつくす責任があることを自覺するところに、道徳が存するのである。ペスタロッチの言葉を引用すれば、「自然性がわが動物的存在を道徳的対象に結びつけることが近ければ近いほど、またその動物的愉快および動物的苦痛が余に触れれば触れるほどいよいよ道徳への刺戟と動機と手段とを見出す」のである。これによってみれば、彼は動物的衝動は常に道

徳的行為の刺戟動力となるものと考えたことがわかる。

しかるに社会生活は、われわれの利己的感情と好意的感情とを、永遠の転変の中に一致させたり、分離させたりして、一面ではわれわれを向上させ、他面では硬化させるものである。このように社会状態は、われわれの向上という点からみれば常に中間の地位にある、ということに注目しなくてはならない。道徳的事項を動物的衝動に近づけ、われわれの利己的感情と好意とを一致させることそれ自体は、われわれを道徳的にするものでなく、われわれはわれわれ自身の力によって道徳的になるのである。すなわち「動物的近接」(tierische Nahrung)が決してそれ自身道徳であるのではなく、かえってあくまでも「道徳への誘導」(Einlenkung zur Sittlichkeit)という点に、本来の意味を有するのである。われわれの自然性において、この誘導を可能ならしめる最高のものは、われわれみずからに存する。宗教(Religion)がそれである。しかしわれわれの利己性と好意とを調和させるこの最上のものも、社会人そのものを道徳的にするものでない。われわれ人類は、利己性と好意とが調和状態を保つのではなく、それが本質的に優位を占めることによって道徳的になるのである。すなわちわれわれが自己の自由意志によって自己の動物性の調和をとどめわれわれ自身を自己の動物的利己性の全要求をもって、自己の意志およびその純化された好意の自由の下に服従させることによって、道徳的になることができるのである。人間としてのわれわれの自然性から出てきた単純な好意こそ、われわれの道徳性を進めるものである。

このように純粹の道徳状態と称すべきものは、人間の根本要求から出てくるもので、理想として人間の希う状態であるが、この道徳状態はなかなか人間に実現されるものではなく、人間は常に社会状態の暗い影に悩まされている。ここにペスタロッチの宗教的要求への発想がみられるが、社会状態の暗さというものに徹して、そこから宗教の絶対境を感得しているかといえれば決してそうではない。ペスタロッチの宗教は、ここにおいて甚だ不徹底なものとなっているといわざるをえない。しかし『探究』をみれば、ペスタロッチにおける自己の問題は、けっきよく宗教に帰趨するのである。

以上『探究』の中心思想たる自然状態・社会状態・道徳状態という三状態の考察によって、三様の人間の存在形態とその相互の移行関係とを明らかにすることができ、したがってまた本稿の意図するペスタロッチの道徳思想を、ほぼ知ることができたと思う。

『探究』においてペスタロッチは、著作の中心たる自然人・社会人・道徳人へと螺旋的に叙述を進め、真実な人間存在を「自然の進行」(Gang der Natur)を通じて探究し、人間の自然状態および自然性は、道徳状態と結合することがきわめて容易である、と考えた。ここにルソー (Rousseau, J.J. 1712~78) が自然人 (l'homme naturel) と社会人 (l'homme civil) とを、また自然秩序 (l'ordre naturel) と社会秩序 (l'ordre social) とを対比することによって、そこにわれわれ人間のあり、かつあるべき「自然の進行」(la marche de la nature) を新たに見出そうとした見解の影響を認めざるをえない。しかしルソーは現実の社会とその文明とを呪って、原始の社会にその理解を投射してそれを眺めようとしているのに対して、ペスタロッチは現実の社会の相に一そう深く沈潜しようとしている点に、両者の相違がみられる。終始変わらずペスタロッチを方向づけていた問題は、人間本来の「自然衝動」(Naturtrieb) すなわち「動物的自然」(tierische Natur) が、はたしていかなる根拠により、またいかようにして道徳へとひるがえされてくるかということであった。『探究』におけるペスタロッチの思想の発展は、第一の「自然状態」から第二の「社会状態」へ、そしてさらに第三の「道徳状態」へと、時間的に、継続的に、しかも必然的に移行している。が第一の人間が本能の子として自然的清浄無垢のうちに生きている、人間の「自然状態」を否定するものは、第二の利己主義を基調とする「社会状態」であるが、しかもこの両者を否定するものこそ第三の「道徳状態」であって、その中で人間が自発的要求と社会的要求とを、その高い道徳的本性に従属させている。したがって第三の「道徳状態」は、前二者を同時に否定することによってこの両者を克服し、しかも前二者よりもより高次の立場に止揚されて

いるのである。

『探究』は、すでに述べたように、 $\kappa$ 人間の本質とは何か $\kappa$ という問題に対して、人間の資質とか力とかが探究の対象になっているのではなくて、人間の道徳的本質 (Sittliches Wesen) がその対象となっているのである。しかもその道徳なるものは、個人にあってはその動物性およびその社会的関係と密接に関連している。道徳はその本質において、全く人間の意志の自由、すなわち自己の木性に依存するものである。ここに人間の道徳的自律 (sittlichè Autonomie) が考えられる。デレカート (Delekat, F) によれば、道徳は社会状態から自然的に成長するものでなく、むしろ自律的根源 (autonomer Ursprung) をもつものである。ペスタロッチは道徳または意志をもって、人間のすべての力の有機的<sup>18</sup>中心と考えていた。彼の社会観の帰結は、われわれの生命の廢墟の上に立って、そこに開けるべき道徳の世界の内的的待望にある。道徳の優越性は、実に『探究』の中心思想である。長田新博士に従えば、ペスタロッチはこの書において、道徳性をもって人類の本性におけるもっとも内的なものと見、かつこれをわれわれ人類の全目的であるとさえ考えたのであった。

<sup>19</sup>  
感覚の時代を止揚して束縛の時代に入り、束縛の時代を止揚して真の自由の時代に入るといふ。それは結局道徳的自覚の内容として豊かなる生命を包括するということになる。動物性も社会性も道徳性以外に拒斥せられるというのではなく、すべてが純化せられて道徳性の内容となるという。そこに吾人は全人の豊かなる教育を目指すペスタロッチを見るのである。<sup>20</sup>  
と敬虔に説く福島政雄博士の言葉を引用して、この小論のしめくくりの言葉としたい。

- 註 1 Heinrich Pestalozzi Gesammelte Werke, Neunter Band, s. 53  
2 長田新『ペスタロッチ教育学』p.104  
3 福島政雄訳『探究』小原国芳編、ペスタロッチ全集 第4巻 p.1  
4 同書, p.4  
5 Heinrich Pestalozzi Gesammelte Werke, Achter Band, s.s.106~7  
6 Derselbe, s.124  
7 Derselbe, s.s.126~7

- 8 Derselbe, s.131
- 9 Derselbe, s.133
- 10 Derselbe, s.135
- 11 福島政雄『ペスタロッチ』p.158
- 12 Heinrich Pestalozzi Gesammelte Werke,Achter Band, s.152
- 13 Derselbe, s.170
- 14 岩崎喜一『ペスタロッチー研究』p.147
- 15 Heinrich Pestalozzi Gesammelte Werke,Achter Band, s.s.173~4
- 16 Derselbe, s.176
- 17 Derselbe, s.180
- 18 F.Delekat, Johann Heinrich Pestalozzi, s.194
- 19 長田新『ペスタロッチー教育学』p.201
- 20 福島政雄『ペスタロッチの根本思想研究』p.p.261~2